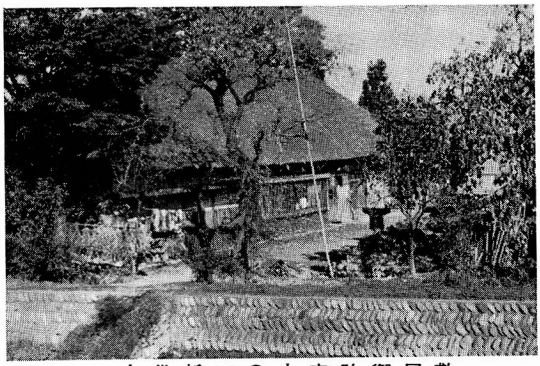
ちゅうもん造りの屋根の曲折部をだきといっているが、雪国では屋根の損傷率が多いから、一般の屋造りには用いないし、新に改装する場合は、畜舎や作業小屋を別棟として独立させ、いっぽんやにしようとする傾向がある。

旧肝煎宅、郷頭宅などは、役宅を兼ねているので、乗りこみという、籠などを玄関に横付け出来るように、家格を誇示するような屋造りが残っている。戸や壁板を張るなどして改装されているが、中荒井村旧郷頭小森宅などには立派な乗込みがあり、下荒井の肝煎宅などにも残っている。明治以後の建築には、このような家格による



宮袋新田の水害防禦屋敷

宮袋のくらざしきと屋敷構え（鶴沼川の水害防禦の土堤、石垣、寄せ棟、やぐら破風の煙出し—現在トタンぶき、くらざしき、土蔵、前庭園、さえん、果樹園）

金屋旧肝煎宅の裏ちゅうもん造り（中門造り）